

メキシコ大地震を現地に見る(海外短信)

著者	石井 章, 星野 妙子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	2
号	4
ページ	24-25
発行年	1985-12-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006756

メキシコ大地震を現地に見る

9月16日はメキシコの国民の祝日のなかでも最も輝かしい日、独立記念日である。今年の9月16日は月曜日にあたったため、人々は土曜日から3連休を楽しむことができた。連休が明けて3日目、ようやく仕事も元のペースに戻った木曜日の早朝に悲劇は起こった。9月19日は悲しい記念日として今後長くメキシコ人の記憶に留められるであろう。

当日私は北西部太平洋側のシナロア州クリアカン市に滞在していた。メキシコ市とは1時間の時差があるため地震の起こった午前7時19分は現地では6時19分で、まだベッドのなかにいたが揺れはまったく感じなかった。8時すぎホテルの近くの旅行会社ではじめてニュースを知らされる。——大地震のためメキシコ市との間の電話、テレックスとも交信不能。テレビ塔がやられTVは1局を除き放映不能。ビルの倒壊により多数の死傷者が出た模様。停電。断水。地下鉄は全面ストップ。空港は閉鎖等々——。時間が経つとともに現地のメキシコ人の間でいろいろな噂が広まりだす。「地下鉄道が潰され、電車に乗っていた人が大勢生き埋めになった」（これは事実ではなかった）といった種類のものだ。

交信が跡絶えているためメキシコ市在住の友人、知人の安否がわからず不安はつのる。夜ホテルでテレビをつけると画面にはビルの倒壊現場や救出活動をはじめ首都の惨状が映し出され、テラマドリ大統領が沈痛な表情で、「国難」を前にして国民の連帯と協力を呼びかけている。メキシコ市は本当に潰滅し、中心部は廃虚になってしまったのだろうか。

メキシコ市国際空港は幸い被害を免れ、国際線、国内線とも翌日には運航を再開した。空港が無傷

メキシコ頑張れ

石井 章



であったことがどれだけ国外からの救援活動にプラスになったかはかり知れない。もう一つ幸いだったのは地震の起きたのが早朝でまだ出勤時間前だったため、多くの官庁ビルが倒壊もしくは執務不能の状態に陥ったにもかかわらず、そこでは人命の犠牲がなかったことである。その一方で

はホテルや病院で多くの人命が失われた。犠牲者の数は5000人を超え、行方不明者を絶望とみなせば1万人近くに達するといわれる。

私は地震発生から10日経った9月29日夜、空路メキシコ市に入った。翌朝タクシーで市の中心部を目差すが、いたるところで通行止めや迂回があるうえ交通渋滞と重なってどうしても行き着けず、やむなく地下鉄に切り換えて最も被害の大きかったファレス街あたりに近づく。倒壊したビルの瓦礫の除去作業がすでに始まっており、一般車は通行止め、商店もシャッターを下ろし、ふだんは賑やかなファレス街もゴーストタウンの静けさだ。地下鉄の駅には行方不明者の顔写真と尋ね人の貼り紙がいくつもあり痛ましかった。

メキシコは巨額の対外債務に加えて地震の災害復興のため今後苦難の道を歩まなければならないが、明るい材料もないわけではない。今回の大地震に際しては関東大震災のときにあったような不祥事や、暴動の類は起こらなかった。その反対に、ふだんは利己的で自己主張の強いメキシコ人が、この「国難」に際してよき連帯を示したことである。とくに若い人たちがボランティアとして積極的に救援活動に参加した。この若い人たちの連帯とエネルギーがメキシコをかみならず立ち直らせるであろう。メキシコ頑張れ。

(いしい・あきら／調査研究部)

メキシコ大地震を現地に見る

大地震体験記

星野妙子



大地震といわれてもいまだにピンとこないのが今回の地震である。9月19日早朝、ベッドから起きあがったとたんにユッサ、ユッサときた。ゆっくりした横揺れがしばらく続いたが、何事もなく収まった。すぐに停電したので、少々強い地震だったのかなとは思った。しかしまさか5ケタの単位で死者を出す大地震と

は夢にも思わなかった。それは私ばかりでなく、多くの私の友人も同意するところである。今回の地震のひとつの特徴は、同じメキシコ市のなかでも揺れ方が場所によって大きく異なり、被害が市の中心部など一部の地域に集中したことであった。地盤の構造が明暗を分けたというのが通説となっている。ちなみに筆者の住まいは今回の地震で建物が倒壊し1000人以上の犠牲者を出したセントロ・メディコ（医療センター）、ベニト・ファレス団地からおよそ4キロの場所にある。しかし住まい周辺は被害ゼロであった。

被害地域が市の中心部であったことが、多数の死傷者を出すとともに、行政機構に重大な打撃を与える結果を招いた。しかしその他の地域が無傷であったことは、不幸中の幸であった。ひとつはパニックが回避できたことである。被災地の外ではすでに地震の翌日から平常とそれほど変わらない市民生活が営まれていた。テレビに映し出される被災地の惨状がまるで遠い世界の出来事であるかのようにであった。もうひとつは救援体制が確立できたことである。地震後すぐに、あちこちに公営、民営の救援物資の受け所、被災者宿泊所が設置された。それらの場所に食料品、衣類、医薬品を届ける市民の姿がひきもきらなかつた。また市民のイニシアティブでボランティアの組織が続々とつくられ、生き埋めになった人々の救出、

物資の集配、簡易宿泊所の運営に大活躍であった。ちなみに筆者の所属するコレヒオ・デ・メヒコでも地震当日に救援物資、救援金の受付窓口が開設され、2日後にはボランティアの組織化が開始された。未曾有の大惨事を前にしての市民の団結はまことに見事であった。

ところで、以上のべたように、被害地域は一部に集中し、市民の対応も思いのほか沈着、冷静だったのであるが、日本にはそれは伝わらなかったようである。筆者が後に入手した新聞記事を読むと、「首都の3分1倒壊」「包む猛火 パニックの町」「ガス管分断」等々、いったいこの話だろうと思うような記事ばかりである。このような記事が生まれたひとつの原因は、地震で中央通信局が倒壊し、地震直後メキシコ市と外部の通信が途絶したため、米国より未確認の情報が世界へ流れたためと思われる。しかし特派員が現地で書いたことになっている記事にも首をかしげたくなるようなものが多数あった。たとえばガス管の話为例にとれば、当地の地下には分断されるようなガス管は通っていない。各家庭、または建物がLPガスのボンベまたはタンクを備えるシステムである。今回の地震は、日本の新聞報道の内実を理解するうえでも、非常に貴重な機会を提供してくれた。

(ほしの・たえこ／在メキシコ・シティ海外派遣員)